

保育学生による地域子育て支援の取り組み —2018年度活動報告—

**A Community Parenting Support Program by Students in Early Childcare
Practical Training School: A Report of the Activity 2018**

荊 木 まき子 ・ 鎌 田 雅 史
松 本 希 ・ ズビャーギナ章子
小 谷 彰 吾 ・ 土 田 耕 司
伊 藤 優 ・ 秋 山 真理子
柴 川 敏 之 ・ 澤 津 まり子

保育学生による地域子育て支援の取り組み

—2018年度活動報告—

A Community Parenting Support Program by Students in Early Childcare
Practical Training School: A Report of the Activity 2018

荊木 まき子 (幼児教育学科)・鎌田 雅史 (幼児教育学科)

IBARAKI Makiko

KAMADA Masafumi

松本 希 (幼児教育学科)・ズビャーギナ章子 (幼児教育学科)

MATSUMOTO Nozomi

ZVYAGINA Akiko

小谷 彰吾 (幼児教育学科)・土田 耕司 (幼児教育学科)

KOTANI Shogo

TODA Koji

伊藤 優 (幼児教育学科)・秋山 真理子 (幼児教育学科)

ITO Yu

AKIYAMA Mariko

柴川 敏之 (幼児教育学科)・澤津 まり子 (幼児教育学科)

SHIBAKAWA Toshiyuki

SAWAZU Mariko

本学幼児教育学科では、子育て支援を目的とした学生ボランティアグループG B A (Girls and Boys Be Ambitious の略、以下では「G B A」と記す)を結成し、2018年度で13年目を迎えた。G B Aの主な活動は、「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」(以下では「就実やんちゃキッズ」と記す)の開催であり、過去12年間の取り組みについては既に報告済みである^{1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12)}。

昨年度の報告では、今後の課題として、①学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化、②G B Aという組織の見直しとそれに伴う活動の合理化、③全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくりの3点を挙げた。

第一の課題である、学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化については、就実やんちゃキッズの在り方について学科のFD等において継続的に議論されてきた。就実やんちゃキッズを主催するG B A (Girls and Boys be Ambitious; ぐば)や中四(中四国保育学生研究大会; ちゅうし)は、有志の学生による任意団体であるが、就実やんちゃキッズは幼児教育学科が支援する子育て支援事業の趣旨から、2016年度より公式的な学科行事に準ずる活動と位置づけられた。学生の主体性が損なわないように留意しながら、幼児教育学科の教育活動との双方の関りについて継続的に検討していく必要性が認められる。

第二の「G B Aという組織の見直しとそれに伴う活動の合理化」については、近年就実や

んちゃキッズに参加する学生の割合が急上昇している点と関係する。2018年現在で、およそ8割の学生がG B Aもしくは中四のメンバーとして主体的に就実やんちゃキッズへ参加している。また、地域の子育て支援事業としても周知されてきており、来場者数も増加傾向にある(2017年度は、1466名;保護者656名,子ども810名)。活動規模の拡大に伴い、学生間の連絡や当日の準備が難しくなってきた側面がある。また、沢山の来場者を迎えるにあたって、駐車場の確保、会場案内、運営時における安全管理やトラブルへの対応などに関しても課題が噴出してきた。以上のような課題に対処するために、メンバー間での連携や調整を緊密にしていくことが求められる。個々の学生に過剰の負担にならないように、さらに主体性を尊重しながら安定して継続してくためには、運営体系や学科によるバックアップの在り方、業務内容を合理化していく必要に迫られている。

第三の課題「全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり」については、継続的な課題として例年改善を試みている。『地域の子育て支援』という原点に立ち、継続してすべての引率者が子どもと一緒に安心して参加しやすい環境づくりに力を入れている。来場者に対して、目配り心配りをして寄り添う態度を身に着けることは、学生にとっても、大切なことである。

本報告は、上記のような課題解決を念頭においてすすめた、2018年度の地域子育て支援の取り組みについて、経過及び結果をまとめたものである。

1 「就実やんちゃキッズ ～きてみてあそぼうでえ～」

1) 活動内容

就実やんちゃキッズとは、地域貢献および教育活動の一環として幼児教育学科の学生が結成したG B Aを中心としておこなう子育て支援イベントのことである。就学前の子どもとその保護者を対象に、本学の体育館アリーナで年間4回、土曜日の午前に開催した。なお今年度でG B Aは結成13年目、就実やんちゃキッズは12年目を迎える。

就実やんちゃキッズのプログラムは前半と後半に分かれており、プログラム前半は、パネルシアター・リズム体操・オペレッタ・手遊び、プログラム後半は様々な遊びをおこなうことのできる「交流広場」である。具体的な活動の様子については図1を、具体的な公演演目や参加人数については表1を参照されたい。

G B Aは、短期大学の有志団体であるという特質上、活動を安定的に継続するために、会計業務や、他部局との折衝や調整、広報活動等に関しては教員が分担している。その一方で、G B Aは有志の学生の任意団体であるという理念があり、当日の運営など主要な活動、例えばプログラム作成や練習、準備、リハーサル、当日の運営、振り返りに関しては学生が主体的に行い、教員はあくまでも助言者や支援者として位置づけられている。なお本活動は岡山市および岡山県教育委員会および岡山県からの後援を受け実施している。

表1 就実やんちゃキッズ活動内容

日 時	公 演 演 目	参加人数	学生数
第1回 5月21日	パネルシアター 「おばけのおつかい」 リズム体操 「ばわわぶ体操」 オペレッタ 「おおきなかぶ」 * 幕間に手遊び、公演後交流広場	大人 178人 子ども 214人	119人
第2回 6月25日	パネルシアター 「いぬのおまわりさん」 リズム体操 「ハッピージャムジャム」 オペレッタ 「しらゆきひめ」 * 幕間に手遊び、公演後交流広場	大人 373人 子ども 423人	143人
第3回 11月26日	ペープサート 「どんぐりころころ」 リズム体操 「ドンスカバンバンおうえんだん」 オペレッタ 「ねえきいて～勇気をもって伝えよう～」 * 幕間に手遊び、公演後交流広場	大人 181人 子ども 231人	92人
第4回 1月26日	パネルシアター 「コンコンクシャンのうた」 リズム体操 「マル・マル・モリ・モリ！」 オペレッタ 「てぶくる」 * 幕間に手遊び、公演後交流広場	大人 143人 子ども 156人	99人



パネルシアター



リズム体操



オペレッタ



手遊び



交流広場（滑り台）



交流広場（新聞シャワー）

図1 就実やんちゃキッズのプログラム

毎回の活動では、就実やんちゃキッズ本番の12日前（前週の月曜）までに、公演のリーダーの学生が中心となって演目を決定し、教員に知らせる。教員は、学生からの連絡に基づき、関係部局に広報を依頼し、本学科のHPにおいて告知を行っている。また、学生から相談や依頼がある場合には、一緒に考えサポートするようにしている。

就実やんちゃキッズのある週の火曜日には、18：00から本学の体育館アリーナで、本番のリハーサルと当日に向けたミーティングを開いている。他の業務等に支障をきたさない範囲において、学科の教員全員が参加し、公演における表現やプログラム後半の交流広場における安全管理等について適宜助言をしている。リハーサルや、ミーティングの進行については、G B Aのリーダーたちが司会を務め、準備の確認やプログラムの改善を諮っている。対外的行事であるため、就実やんちゃキッズと学内の他部局のイベント等との調整等が必要な場合

は担当教員が行い、連絡事項としてこの会において報告している。

2) 課題の達成状況

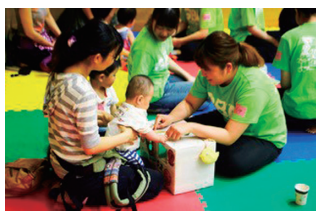
i) 学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化

冒頭に記したように、就実やんちゃキッズの活動は、幼児教育学科の有志団体G B Aおよび中四が主催する学生のボランティア活動としての側面と、幼児教育学科が支援する学科行事としての両側面を有している。就実やんちゃキッズと、幼児教育学科との関りについては、学科のFD会議等の場で繰り返し議論が重ねられてきた。

学科の教員が就実やんちゃキッズの業務の一部を担当する理由は、2年サイクルで学生が入れ替わる短期大学であり、また2年生が保育・教育・施設実習や就職活動等で多忙になり、1年生に活動の引き継ぎを十分に行うことが難しい本学科の特性において、就実やんちゃキッズを持続的に発展させるための支援が不可欠であるといえるからである。また、近年G B Aと中四に幼児教育学科の80%もの学生が所属していることや、多くの来場者を迎える対外的行事に発展してきた経緯もあり、危機管理や安全管理の側面からも教員からの補助が必要と考えられる。さらに、就実やんちゃキッズは、地域の子育て世帯と学生が実際に交流しながら学ぶことのできる貴重な実践的場であるという認識から、学生が能動的に学ぶ場を確保する目的で、学科の初年次教育や授業と連携して、G B Aや中四に所属していない学生であっても参加し、学ぶことができる機会を提供している(図2 ① ②)。



① 図画工作授業との連携



② 手作りおもちゃの実践



③ リハーサル後の振り返り

図2 授業との連携と、学生主体の運営の両立

一方で、就実やんちゃキッズは、強制ではなく学生が主体として実施するボランティアであるという理念をもつ活動である。実際に、これらの団体への所属の有無によって学生がペナルティーを受けたり、優遇されたりはしない。それにも関わらず多くの学生がG B Aや中四に参加し、意見交換をしながら活動の充実に努めている(図2 ③)。原則として教員は、表現や運用等について学生を支援する助言者として関わっており、最終的には学生たちによる決定事項が尊重されるように配慮している。

就実やんちゃキッズが学生主体の活動であるという理念については、4月のオリエンテーション期間中の新生へへの説明会や、5月・6月の全体ミーティングでも繰り返し話し合い、意識共有を計っている(図3)。



①学生リーダーによる司会

②役割決め（1年生）

③役割決め（2年生）

図3 ミーティングの様子

ii) GBAという組織の見直しとそれに伴う活動の合理化

2018年10月現在で、GBAには1年生78名（全体の82.10%）2年生83名（81.37%）の学生が所属している。GBAは、Aチーム、Bチームという2つのチームで構成されており、Aチームには幼児教育学科での前半5クラスの学生、Bチームには後半5クラスの学生が所属しており、各チームリーダーが相談しあうことで全体の活動調整をしている。GBAでのチーム編成が、大学でのクラスに基づく理由は、学生間の時間割などが類似しておりスケジュールの調整がしやすいことや、通常の授業に顔合わせする機会が多くコミュニケーションが取りやすいからである。しかし近年、加入学生の増加や、SNSを用いた連絡調整方法が主流となり、連絡調整が困難となったり、学生間での意識の温度差が問題視されるようになったりしてきた。また、リーダーの負担が大きくなり、リーダー自身の学生生活を圧迫しかねないことが懸念されてきた。この点について2016年から、リーダーの負担を軽減することや、学生全体のモチベーションを高めていくための組織の見直しを継続的に行ってきた。以下に代表的な取り組みを示す。

第一に、クラスごとのリーダー（連絡係）の配置である。就実やんちゃキッズの役割は、毎年5月のミーティング時に学年ごとで話しあい決定している（図3）。本年度は、3月に2年生リーダーと教員で役割配分の見直しを話し合った。参加学生の増加に伴い、従来は幼児教育学科におけるクラスごと（10クラス）の所属学生数が偏っていたが、近年はどのクラスにも一定数以上の学生が加入していることから、1年生に関し、試験的に各クラスに連絡係を配置することとした。連絡係は、クラスの意見を取りまとめたり、情報伝達を行ったりという業務を担う。本年度、11月の就実やんちゃキッズから1年生が中心となって運用するため、10月現在においては試運転段階ではあるが、9月末に行った1年生リーダーのミーティングにおいては、今後の協力体制の在り方を確認している。今後、連絡係と全体のリーダーとの関りに関する経過を見守っていくことが必要である。

第二に、公演部の分担スケジュールの作成と、各演目のパートリーダーの明確化である。この取り組みは、2016年から継続的に実施している。従来は、AチームBチームのチームリーダーが、毎回の就実やんちゃキッズごとに演目の脚本を手掛けたり、練習を統括したり、演出を担当したりと複数の役割を担う傾向が強く、時に大きな負担となっている姿が見受けら

れた。この点に関し、各演目の責任者となる学生を事前に決定しておくことで、特定の学生に役割が集中するのを避け、スケジュールや役割分担が曖昧なために準備が遅れてしまうリスクを軽減することが可能となった。本年度は、5月の初回ミーティングに、就実やんちゃキッズの年間スケジュールと、Aチーム、Bチームの公演分担表を作成し、手遊び、パネルシアター、リズム体操、オペレッタそれぞれの演目に関して、各回のパートリーダーを決定した。Aチーム、Bチームのチームリーダーは全体の統括に位置付けられており、パートリーダーは立候補制で募る方法で決定している。

iii) 全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり

就実やんちゃキッズの活動目的は、「地域の子育て支援」である。発足以降、全ての参加者が安心して快適に楽しむことのできる活動を発展させることは継続的な課題として掲げられてきた。近年は、来場者の増加にともない駐車場の確保や、会場案内、イベント中の受付業務の混雑や、会場の安全確保の必要性の増加等について、課題が明らかになってきた。

第一に、参加の人数の増加に伴い、駐車場の確保と駐車場から会場までのスムーズな誘導に努めている。駐車場から本学までの経路には、学生が配置され、会場案内を行うようにしている。また、来場者の多くは開始時間の10時前後に集中するため、会場となる体育館アリーナ前の横断歩道が人であふれて安全上の問題が生じないように、2017年度より学生5名と教員が待機し交通整理を行っている(図4 ①)。毎回、多くの来場者が想定されるため、駐車場の申請は年度初めに教員が本学施設課に一括して申請し、駐車場が不足した場合の対応についても適宜施設課と調整を行っている。また、駐車時におけるトラブルを未然に防ぐために、警備員2名を配置している。

第二に、会場案内の充実と安全の確保に努めている。来場者の多くは(本年度46.12%)初参加者であるので、キャンパス内の動線には立て看板や、案内の掲示を行い、さらに会場にのほりを立て(図4 ②)、迷わないように配慮している。これまで会場案内の掲示はその都度、対応可能な受付係の学生が適宜担当していたが、6月の就実やんちゃキッズからは受付係を受付周りの準備班と、学内案内班に分けて準備を効率化している。また、駐車場案内や、キャンパス内での会場案内係は、毎回のイベント前にチームリーダーが中心となって話し合い、決定している。

第三に、受付周りの改善に取り組んでいる(図4 ③)。就実やんちゃキッズへの参加者は、3歳未満の子どもがいる家庭が過半数(56.14%)であり、ベビーカーを利用されている方も多いため、十分なスペースとは言えないが階段下にベビーカー置き場を設けることで対応している。また、会場となる本学アリーナは靴を脱ぐ必要があるため、来場者の増加に伴い、養生テープを用いてラインを引き、視覚的に靴置き場のスペースや、整列の仕方が分かるように工夫している。また子どもが、つまずいたりしないように、靴置スペースの隅切りを行うなどしながら適宜、受付係が靴の整頓を行っている。就実やんちゃキッズが開始してから



図4 安心して参加できる安全な運営をめざして

は、受付場所が本学2階のホールに移るため、階段の手すりの危険性を少なくするように、養生テープを用いて手すりの隙間を埋めるように工夫している。入り口のガラスには、表現の授業で作成した動物シルエットの作品の掲示等を行い、楽しい雰囲気を引き出すような環境構成も併せて考えている（図4 ④）。

第四に、交流広場時の会場の安全の確保や危機管理に努めている。本年度は、交流広場の配置を見直し、従来ステージ中央前付近のカーペット上に配置していた乳児コーナーのジョイントマットを、ステージに向かって左隅の比較的他の遊びの動線と重ならない位置に配置変更することによって、乳児コーナーの安全性を高めるように工夫している（図4 ⑤）。学生たちは毎回の開催後の振り返り会において忌憚のない意見交換をしており、それを改善に結びつけている。また2017年度からは、健康管理を目的とした水分補給対策として、蓋つきの飲み物であればアリーナ内でも飲んでよいというルールを新たに設定し、地域の参加者だけでなく学生や教員にも周知徹底するにしたり、貴重品管理を徹底して、参加者の増加による盗難等が生じないようにしたりと、これまでと同様、学生による来場者への積極的な声かけに努め、来場者が安心して安全に楽しむことができる環境づくりを目指して改善を続けている。

最後に、衛生面での改善に努めている。会場の入り口には学生が除菌スプレーを持って待機し、来場の親子に手の消毒を行っており、また、開催時に使用する布素材の備品については、適宜消毒等を行うことで常に衛生状態を保つように心がけている。ロールカーペットについては、プログラム前半の観覧席、プログラム後半の休憩コーナーのラグとして10年近く使用しており、近年老朽化が激しく取り換えの時期に来ている（図4 ⑥）。本年度では、「学術・文化・スポーツ奨励金」から助成を受けることでロールカーペットを新調する運びとなった。

以上のように、実際の運営の中で析出してきた課題について、メンバーで知恵を出し合いながら、活動の改善に努めている。

2 アンケートの方法及び結果

就実やんちゃキッズでは、活動をよりよいものにしていくために、継続して保護者と学生を対象としたアンケート調査を行っている。回収したアンケート票については、匿名化された状態で、適宜メンバーが閲覧可能なようにGBAの控室に保管するようにしている。以下に本年度、5月6月の就実やんちゃキッズにおけるアンケート結果の概要を示す。

1) 参加者保護者へのアンケートの方法

受付でアンケート用紙を配布し、就実やんちゃキッズ終了時に回収した。アンケートでは、保護者に対し、①就実やんちゃキッズの参加回数、②子どもの年齢、③子どもとの続柄、④就実やんちゃキッズのプログラムの内容に関する意見、⑤今後の参加意思、⑥就実やんちゃキッズをどのように知ったかについて無記名で個人情報がわからないように配慮して尋ねた。

2) 保護者へのアンケート結果

以下の結果は、就実やんちゃキッズ（5/19、6/16）で得られたデータに基づくものである。協力してくださった保護者の数は276名であり、例えば夫婦で回答している場合など、複数の回答者によって答えられたアンケートも含まれ、回収されたアンケートの総数は271件であった。

i. 就実やんちゃキッズの参加回数

就実やんちゃキッズに参加した世帯ごとに、今回の参加が何回目か尋ねた結果を表2に示す。5月における2回以上の参加者、6月における3回以上の参加者は、昨年度以前にも参加している参加者であり、全体の29.52%以上の方が継続参加していることが示されている。また、 χ^2 検定の結果、参加回数に5月における無回答と初参加者、6月における2回目の参加者の比率が多かったこともリピータの多さを示している。（ $\chi^2(3) = 23.69, p < .01$ ）。

表2 就実やんちゃキッズ参加世帯の参加回数

	5月	6月
初参加	69	56
2回目	14	47
3回以上	41	39
無回答	5	0

$\chi^2(3) = 23.69, p < .01$

ii. 参加人数の推移

過去3年における月ごとの参加者の推移を図5に示す。第一回目がテレビ地域ニュースで放映された影響か、第二回目の来場者は最高来場者の796名を記録している。しかし、1年生も2年生の様子を参観する中で、状況に応じて来場した子どもたちに声をかけていたので、大きな混乱は起こらなかった。就実やんちゃキッズをどのように知ったか尋ねた結果を集計したところ、情報源として最も多かったのはホームページ（19.05%）であり（表3）、昨年度の結果と同様であった。ホームページを定期的に更新し、常に新しい情報を提供できるように務めていることもホームページが情報源として活用されている要因の一つと考えられる。

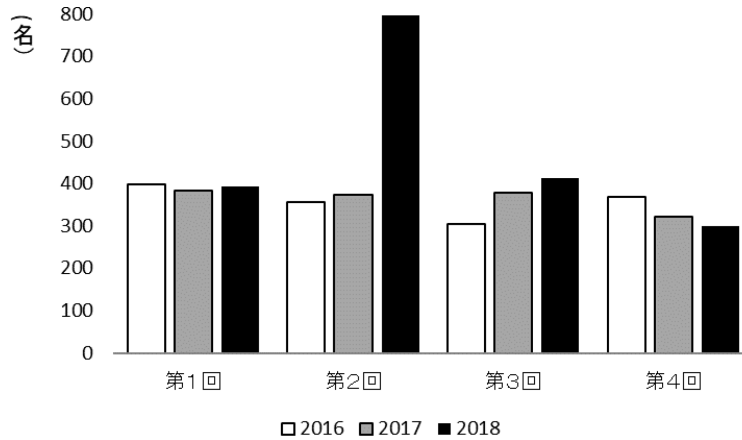


図5 就実やんちゃキッズの参加者の年次推移

表3 就実やんちゃキッズをどのように知ったかについて

	ホームページ	ポスター	チラシ	新聞	知人	就実の関係者	その他
人数(人)	52	48	45	5	43	23	31
割合(%)	19.05	17.58	16.48	1.83	15.75	8.42	11.36

iii. アンケートの記入者と子どもの関係

アンケート記入者と子どもの関係について、表4に示す。引率者の多くは母親であり（72.33%）、次いで父親（23.27%）、祖父母その他（4.40%）の参加が多かった。アンケート記入者のうち、夫婦での参加数が44件（16.23%）あり、父親のみの参加は30件（9.44%）、父または母と一緒に祖父母が参加しているケースは6件（1.89%）であった。子育て支援ボランティアとして、母親が心休まる場となることや、父親が家族サービスすることのできる場となれば幸いである。

表4 引率者の割合

	人数(人)	割合(%)
母	230	72.33
父	74	23.27
祖母	8	2.52
祖父	3	0.94
その他	3	0.94
保護者合計	318	100.00

iv. 子どもの参加人数と年齢について

1世帯辺りの子どもの参加人数は、53.14% (144件) が1人、38.75% (105件) が2人、6.27% (17件) が3人以上であった。また、3歳未満の子どもが56.14%と過半数であった。3歳未満の子どもたちの安全配慮はもちろん、3歳以上の子どもの安全についても意識を高め、幅広い年齢層の子どもたちに対応する必要性が認められる (表5)。

表5 参加した子どもの年齢

	人数 (人)	割合 (%)
1歳未満	49	12.28
1歳以上 2歳未満	84	21.05
2歳以上 3歳未満	91	22.81
3歳以上 4歳未満	76	19.05
4歳以上 5歳未満	45	11.28
5歳以上 6歳未満	33	8.27
6歳以上	21	5.26
合計	399	100.00

v. プログラムについて

①全体の時間

就実やんちゃキッズは、90分間のプログラムで開催している。プログラムの長さについて、参加者の印象を図6に示す。参加者の87.8%がちょうど良いと答えており、プログラムの長さは適切であることが示された。

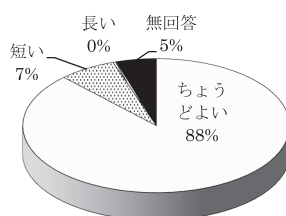


図6 プログラムの長さ

②特に良かったと思うプログラム

アンケートでは、良かったと思うプログラムについて、保護者と子どもに回答を求めた (複数回答可)。保護者と子どもが選んだプログラムを表6に示す。昨年に引き続き、保護者も子どもも、交流広場を良かったとする割合が最も多かった。また、二番目に多かったのが今年度は保護者と子ども、両方がリズム体操であった。これらの結果から、保護者、子どもと一緒に体を動かす遊びに対する満足度が高いことが示された。

表6 特に良かったと思うプログラム

	手遊び	パネルシアター	リズム	オペレッタ	身体測定	交流広場	その他
保護者による選択数	70	59	97	87	23	170	5
(%)	25.83	21.77	35.79	32.1	8.49	62.73	1.85
子どもによる選択数	44	32	51	45	3	145	2
(%)	16.24	11.81	18.82	16.61	1.11	53.51	0.74

vi. 今後の就実やんちゃキッズへの参加意思

図7に示す通り、保護者に対して「次回も参加したいと思いますか?」と尋ねた結果、「思う」と答えた参加者が83%であり、「思わない」と回答した参加者はいなかった。参加したいと答えた参加者は昨年度よりも増えていることから、地域の子育て支援の取り組みとして、本活動は期待されていると言えよう。

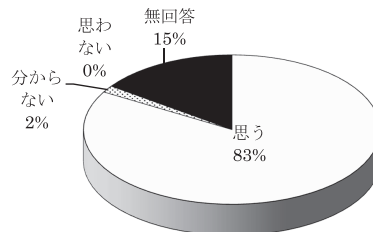


図7 今後の参加意思

3) 学生の振り返りのためのアンケートの方法

本アンケート調査は、学生自身が活動を振り返り、さらに問題点を抽出し、次回以降の就実やんちゃキッズに活かすきっかけとすることを目的にしている。就実やんちゃキッズ終了後の反省会の時間に、学生にアンケート用紙を配布し、回収した。質問紙は、①公演についての振り返り（11項目）、②交流広場（子どもとのふれあい）に関する振り返り（10項目）、③全体に関する満足度の振り返り（2項目）の23の振り返り項目から構成されている。各項目について「あてはまる（5点）」「少しあてはまる（4点）」「どちらでもない（3点）」「ややあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」の5件法にて回答を求めている。加えて、公演と交流広場での活動それぞれに関し、学生がどのような課題を意識するようになったかについて自由記述による回答を求めた。各回でアンケートに回答した学生数は、5月（111名）、7月（142名）であった。

4) 学生へのアンケートの結果について

i. 調査項目の記述統計量

質問項目の集約と今後の改善を目的に、アンケートの各項目に関する、平均値、標準偏差、1変量のt検定における95%信頼区間について表7に示す。学生が楽しみながら、積極的に子育て支援ボランティアの活動を行っていることが伺えた。

また、全体平均の95%信頼区間の推定値が「4：少し当てはまる」に満たない項目については、今年度の学生の課題として捉えることができる。今年度の学生スタッフは、公演に関しては、「人前で演技することが上手になった」「自分自身で創意工夫した」「事前準備・練習がよくできた」といった項目において特に課題を感じていた。2年生にとっては実習前で練習時間や準備が十分とれなかった中での実施であり、昨年度に続いて限られた時間をどの

ように有効に使うか検討していく必要があるだろう。また、交流広場については、「保護者・高齢者と積極的に交流できた」や「遊びのレパトリーが増えた」、「自分に自信がもてるようになった」、「他人の立場や気持を読み取れるようになった」などに課題を感じていた。子どもはもちろん、保護者や地域の方とも積極的にコミュニケーションを取っていくことも今後の課題といえるだろう。

表7 調査項目の記述統計および一変量の t 検定における95%信頼区間の推定

	N	平均値	中央値	標準偏差	標準誤差	信頼区間	
						95%下限	95%上限
サンプルサイズ N=264							
公演について							
事前準備・練習がよくできた。	235	3.68	4.00	1.16	0.08	3.53	3.83
保育に関する技術が身についた。	235	3.97	4.00	1.05	0.07	3.84	4.11
人前で演技することが上手になった。	233	3.19	3.00	1.20	0.08	3.04	3.35
意識して笑顔ができた。	234	4.33	5.00	0.99	0.07	4.21	4.46
積極的に活動できた。	235	4.14	4.00	1.02	0.07	4.01	4.27
みんなと協力することができた。	235	4.22	5.00	1.04	0.07	4.09	4.35
臨機応変に行動することができた。	235	3.89	4.00	1.07	0.07	3.75	4.02
自分自身で創意工夫した。	234	3.62	4.00	1.02	0.07	3.49	3.75
自分の役割がきちんと果たせた。	235	4.08	4.00	1.04	0.07	3.94	4.21
新たな課題が見つかった。	226	3.61	4.00	1.30	0.09	3.44	3.78
交流広場について							
子どもと積極的に交流できた。	249	4.39	5.00	0.90	0.06	4.28	4.5
保護者・高齢者と積極的に交流できた。	249	3.77	4.00	1.15	0.07	3.62	3.91
遊びのレパトリーが増えた。	249	3.61	4.00	1.02	0.07	3.48	3.74
自分も楽しく参加できた。	248	4.46	5.00	0.87	0.06	4.35	4.57
自分に自信がもてるようになった。	248	3.72	4.00	0.99	0.06	3.59	3.84
他人の立場や気持を読み取れるようになった。	248	3.84	4.00	0.92	0.06	3.72	3.95
子どもについての理解が深まった。	249	4.08	4.00	0.88	0.06	3.97	4.19
子育て支援への理解が深まった。	248	4.07	4.00	0.91	0.06	3.96	4.19
新たな課題が見つかった。	239	3.88	4.00	1.18	0.08	3.73	4.03
全体的な満足度							
全体的に今日の活動に満足できた。	239	4.28	5.00	1.00	0.07	4.16	4.41

3 おわりに

本年度をもってGBAの活動は13年目、就実やんちゃキッズの活動は12年目を迎えた。本年度の活動は、昨年度の就実やんちゃキッズの抜本的な見直しを引き継ぐ形で取り組んだ。より地域に貢献し、学生にとっても意義ある活動となるように、次年度以降の課題を以下にあげる。

第一に挙げられるのは、継続課題である、全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくりである。子育て支援ボランティアであるということを念頭に、周囲の状況の変化に対応しながら気配り目配りを行い、参加者が安心して楽しむことのできるよりよい活動に昇華していくことは本活動の主眼とするところである。特に、受付周りの安全性の向上や合理化を進めたい。また、次年度から本学キャンパスの新館立替工事が本格化することも念頭に

において会場案内の充実に努めていく必要がある。保護者アンケートによって明らかになったように、参加者の過半数が3歳未満であることや、初めての参加者が半数近い傾向からも、会場案内を充実し来学者の安全確保に努める必要性が示唆される。

第二の課題についても本年度と同様に、学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化を挙げる。加入者数が多くなり、活動全体を統制することが難しくなってきた現状であるからこそ、活動趣旨を見つめなおすとともに、学生の主体性に基づく統治を促す必要性がある。短期大学の学生団体であるということにも鑑み、特定の学生に過重な負担とならないように配慮しながらも、学生の主体性を尊重することが望まれる。そのためには、本年度取り組んだ集団構成の合理化の有効性などをモニタリングしながら、学生たちを見守り、時として支援していく必要性が認められる。

第三の課題は、2年生から1年生への持続的発展に向けた引継ぎ体制の強化である。就実やんちゃキッズは年4回実施しているが、2年生は就職活動が本格化することなど多忙となるため、第3回目(11月)からは1年生が活動の主軸となる。現在のところ2年生リーダーは、1年生リーダーを支援しているものの、全体的に縦のつながりが希薄な傾向があり、業務の引き継ぎが困難となっている。この点について、安定的、持続的に本活動を発展させ、また学生が自律的に活動を行うためにも、年度を越えた活動の質の維持について話し合い改善していく必要性が認められる。

以上から、G B Aの参加者増加に起因する課題として、①全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり、②学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化、③持続的発展に向けた引継ぎ体制の強化を次年度以降に取り組むべき課題として挙げる。

謝辞

2018年度のG B A及び就実やんちゃキッズの活動は、平成30年度就実大学・就実短期大学 学術・文化・スポーツ奨励金を受け実施した。記して深謝致す次第である。

引用文献

- 1) 村田恵子、澤津まり子、立石あつ子(2006). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—備前地域子育てキャラバン事業報告—、就実論叢、36(社会篇)、pp.135-152.
- 2) 澤津まり子、永田彰子、田中誠、立石あつ子(2007). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2007年度活動報告—、就実論叢、37(社会篇)、pp.81-98.
- 3) 澤津まり子、堤幸一、立石あつ子、伊藤真、笹倉千佳弘、田中誠、永田彰子、山根薫子、Z. 山田章子(2008). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2008年度活動報告—、就実論叢、38(社会篇)、pp.285-298.
- 4) 澤津まり子、伊藤真、堤幸一、立石あつ子、笹倉千佳弘、Z. 山田章子、田中誠、山根薫子(2009). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2009年度活動報告—、就実

論叢、39、pp.233-247.

- 5) 澤津まり子、立石あつ子、柴川敏之、秋山真理子、堤幸一、笹倉千佳弘、田中誠、山根薫子 (2011). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2010年度活動報告一、就実論叢、40、pp.163-172.
- 6) 澤津まり子、柴川敏之、松本希、鎌田雅史、Z. 山田章子、秋山真理子、笹倉千佳弘、田中誠、山根薫子 (2012). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2011年度活動報告一、就実論叢、41、pp.175-186.
- 7) 松本希、柴川敏之、澤津まり子、鎌田雅史、田中誠、秋山真理子、Z. 山田章子、笹倉千佳弘、山根薫子 (2013). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2012年度活動報告一、就実論叢、42、pp.161-174.
- 8) 松本希、田中誠、澤津まり子、鎌田雅史、秋山真理子、笹倉千佳弘、柴川敏之、Z. 山田章子、山根薫子 (2014). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2013年度活動報告一、就実論叢、43、pp.325-336.
- 9) 田中 誠、秋山真理子、鎌田雅史、蔵永 瞳、澤津まり子、笹倉千佳弘、柴川敏之、Z. 山田章子、松本 希、山根薫子 (2015). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2014年度活動報告一、就実論叢、44、pp.291-301.
- 10) 秋山真理子、鎌田雅史、柴川敏之、蔵永 瞳、笹倉千佳弘、澤津まり子、Z. 山田章子、田中 誠、山根 薫子 (2016). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2015年度活動報告一、就実論叢、45、pp.209-223.
- 11) Z. 山田章子、鎌田雅史、松本希、伊藤優、荊木まき子、笹倉千佳弘、柴川敏之、秋山真理子、澤津まり子、田中誠 (2017). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2016年度活動報告一、就実論叢、46、pp.187-198.
- 12) Z. 山田章子、鎌田雅史、松本希、伊藤優、荊木まき子、笹倉千佳弘、柴川敏之、秋山真理子、澤津まり子、田中誠 (2018). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2017年度活動報告一、就実論叢、47、pp.199-210.